姉欲しとおもひし頃の吊しのぶ

藤田湘子

姉が欲しいと思う年頃は何時頃だろう。少年期から青年期に移る頃であろうか。それとも青春の頃。元来マザコンである男たちは、年上の女性に憧れ、小学校の女先生に始まり、恋の手ほどきを受ける年上の恋人を経て、年下の恋人を欲する頃まで続くのだろうか。

それにしても、取り合わすものが、なぜ「吊しのぶ」なのだろう。じめじめとして地味な、羊歯類を苔玉にして軒下に吊して涼を呼ぶ、あの釣忍。

「頃の」の「の」が曲者である。青春の脳裏に刻まれた「物」は、後にそれと会った時に、一瞬にして昔に引き戻され懐かしく思うもの。作者は吊しのぶを見るたびに、ある女性を思い出していたのであろうか。

１９８４年（s59.06作）第七句集『去来の花』　鑑賞・野本 京